

佐藤愛子女史は神仏の加護が得られなく成った事に関して「日本人はかつて勤勉、努力家で情を大事にし、親切で正直で忍耐力のある、つまり精神性の高い民族として外国の人に賛仰されていました。物質的な成功者よりも、貧乏だけれど正直者や働き者に価値を置くという傾向がありました。その美德が敗戦を境に少しずつ減っていき、バブルを頂点に贅沢や快楽を得る事を幸福だと思うようになった。つまり親切よりも物質的欲望の充足に向かいました。そこから放たれる波動が神仏に届くわけがないと私は思うのです。」と、御守護頂けない理由を上げて見えます。時機相応の考え方もあるとは思いますが心の文化を大事にする事は時代の変遷に関係ないと私も思います。コロナウイルス感染症を天罰とは申しません。天罰という表現を使わなくて済む社会が続く事を願っています。

俳優の故、三國連太郎さんは著書・歴史小説の中で「永劫の彼方へ葬り去られた民衆の、のたうち叫ぶ呪詛に満ちた、息づかいが地を這う、浄土を求めて止まなかった民衆の、現世の浄土の、またの名を、彼らは増悪をこめて、地獄と呼んだ」と記した。コロナウイルス感染症で悩む、世界の現状は地獄の有様を想像させます。この事態だけでなく、我々は時として地獄の苦しみを、味わう事に遭遇してしまうのです。彼は「平等と平和こそが人間のゆういつの遺産であると訴え続けて見たいと思うのである」と締めくくってみえます。当山は癒やしを求めて、多くの方が参拝に見えます。心の安らぎを得る事こそが、信心のご褒美だと思っっていますし、平等と平和に繋がると信じています。

中西政次氏はその著の中で「人の幸・不幸は一代で評価することはできないものである。祖父母の積んだ徳は百年の後に、その子孫の幸福として現れてきている。神仏の实在を目の当たりに見る心地がある。」と言われました。又、「怒ると言う時は心の中で腹を立てているのだが、叱ると言う時は、腹は立っていないが、その子（人）が良い子（人間）になるように注意するのである」と、怒ると叱る、その違いを説明されました。違いに気をつけて実践しましょう。「短気は損気」腹を立てずに心を丸くと言われるように、人生訓として守っていきたいと思うのです。忿怒の形相をした佛様を拝まれる時は、自分を見つめ怒られるようなことをしていないか、見つめ直す機会が与えられたと思っ下さい。自行化他です。心の中には善魂と悪魂が存在しています。「後悔先に立たず」……。

中日春秋に「ノーベル医学生理学賞を受賞された本庶 佑さんが「幸福感に関する生物学的随想」の中で金や名誉などへの欲望を満足させることで得られる幸福感には限界や飽きがくる。むしろ、人が幸せを感じるのには恐怖や不安感がないときだろう。その幸福感も相対的なものであって永続的に幸福を感じるためには、時折の軽い不安感によって、そのありがたみを確認する必要もありそうだ」と述べて見えます。個々夫々感じ方の違いが有るので、一概には言えませんが、災害に遭遇した画面を見ると、つい、自分の処でなくて、良かったなんて、不謹慎な感情を抱いてしまう。人間失格です。尚、善入院檀信徒の方々は色々な職業（土木・建築・電気・水道等々）に携わって見えます。又、青少年の徳育には寺子供塾を開いております。ご相談・ご利用下さい